



令和 7 年度

学校評価報告書

帝塚山小学校



学校法人帝塚山学園

令和 7 年度学校評価について

帝塚山小学校は、令和 7 年度の教育活動及びその他の学校運営の状況について、学校評価を実施しました。

学校評価は、本校児童とその保護者を対象とした各アンケート結果、育友会等との懇談会で寄せられた御意見等を活用のうえ自ら評価を行い、さらにその結果について学校関係者による評価を行いました。

このたびの結果を踏まえ、更なる教育水準の向上を目指して、教育活動及び学校運営の改善工夫に組織をあげて継続的に取り組んでいく所存です。

帝塚山小学校
校長 辰巳 喜之

令和 7 年度 学校評価

1. 総括

学 校 名	帝塚山小学校
建学の精神	社会に有為な人材を育成する
重点目標 (教育目標)	「豊かな経験と学力で生きぬく力を育む教育」 “「根っこを鍛える教育」を目指す”
成果と課題	[成果] 令和 7 年度は、前年度までに再構築した教育活動をさらに安定させ、教育の質の向上を図る一年となった。 ①行事運営の安定化と安全への配慮 運動会、音楽祭、国内留学等の主要行事は、コロナ禍を経て見直された新たな形態が本校のスタンダードとして完全に定着した。各行事の教育的価値を再点検し、継続的な安定運営を実現している。夏合宿については、持続可能な教育プログラムとして全学年での内容固定化を継続。特に、昨今の極端な猛暑を踏まえ、児童の健康と安全を最優先に考えた「学期中開催」を定着させ、熱中症リスクを回避した安全な活動を推進している。 ② I C T 活用による個別最適な学びの深化 タブレット端末の活用は導入 4 年目（3～6 年生全員所持）に入り、授業における日常的なツールとして深化を遂げている。これまでの教員研修の成果を活かし、単なる活用に留まらず「学習の個別最適化」に向けた具体的な実践を積み重ねている。学校と家庭の双方向での活用が円滑化したことで、自律的な学習習慣の形成が進んだ。また、緊急時のオンライン授業体制も確立されており、いかなる状況下でも児童の学びを保障できるレジリエンスの高い体制を維持している。 [課題] ①行事運営の検証と改善 猛暑対策で学期中開催とした夏合宿等の行事について、実施後の諸課題を検証し、教育的価値と安全性を両立させた持続可能な形を確立する。 ②デジタルとアナログの最適バランスの追求 I C T 環境の整備と教員研修を一層進めると同時に、本校の教育指針である「読み・書き」の徹底を図り、書くことによる思考の深化を軽視しない教育課程を維持・発展させる。 ③広報戦略の刷新と利便性向上 H P 刷新や S N S 活用を通じた情報発信力の強化により、本校のブランドイメージを広く浸透させる。同時に、出願プロセスのデジタル化等による利便性向上を図り、志願者数の安定的な確保を目指す。

2. 自己評価

評価は4段階【A：十分である（よくできた）、B：ほぼ十分である（できた）、C：あまり十分でない（あまりできなかった）、D：改善を要する（できなかった）】

評価項目	具体的目標・方策 及び評価指標 ※（ ）内は評価指標	自己評価結果		評価結果の分析 (評価の観点、理由)	今後の課題・改善方策
1 建学の精神に基づく学校教育目標の共有化	① 建学の精神に基づく学校教育目標を教員組織内で共通理解し、前年度の反省を踏まえた新たな到達目標を確実に共有するとともに、実行するための校務分掌を構築する。 (校務分掌表、各部、委員会報告書類)	A	A	① 建学の精神に基づく学校教育目標を教員組織内でしっかり共通理解するための会議を実施。到達目標を確実に共有できる機能的な校務分掌を構築し、運用した。	① 建学の精神に基づく学校教育目標を教員組織内で共通理解し、前年度の反省を踏まえた新たな到達目標を確実に共有するとともに、実行するための校務分掌を構築する。
	② 教育目標実現のために、教員組織で検討・研修を重ね、育友会総会及び保護者会で説明の機会を設けるとともに、学校だより、学級通信、校長室だより等を通じて具体的な取組を伝える。 (検討資料、研修資料、全学年保護者会資料、学校だより、校長室だより、学級通信)			② 教育目標実現のために、教員組織で検討・研修を重ねた。保護者には学校だより、学級通信、校長室だより等を通じて具体的な取組を伝えた。	② 教育目標実現のために、教員組織で検討・研修を重ね、育友会総会及び保護者会で説明の機会を設けるとともに、学校だより、学級通信、校長室だより等を通じて具体的な取組を伝える。
2 ICT教育を推進し、教育の個別最適化をめざす	① タブレット端末導入4年目にあたり、デジタル教材、オンライン教材の有効活用に向け、各教科において現状分析と研修を図る。 (研修計画案、実績報告会)	A	A	① タブレット端末導入4年目にあたり、情報教育推進委員会が中心になり、デジタル教材、オンライン教材の研究と研修を実施した。学年ごと、教科ごとに、実績報告会を実施、情報を共有した。	① タブレット端末導入5年目にあたり、デジタル教材、オンライン教材の有効活用に向け、各教科において現状分析と研修を図る。
	② 各教科における、タブレット端末活用実績に基づき、有効活用を積極的に推進し、効果を検証する。 (タブレット活用実績、検証資料)			② 情報教育推進委員会が中心となり、タブレット端末の活用法に関する研究を推進した。学年ごとの目標に沿って有効活用を進めた結果、その成果を確認することができた。	② 各教科における、タブレット端末活用実績に基づき、有効活用を積極的に推進し、効果を検証する。
	③ 各学年での学力定着を強化し、児童の学力向上を図る。児童所有のタブレットをはじめ、ICTを有効活用した学習の個別最適化を目指す。 (タブレットを活用した個別最適化学習の実施、検証ロイロノート研修)			③ 児童のさらなる学力向上を目的としてロイロノートの本格運用を開始し、3年生以上の学年でタブレットを活用した学習の個別最適化を推進した。	③ 各学年での学力定着を強化し、児童の学力向上を図る。児童所有のタブレットをはじめ、ICTを有効活用した学習の個別最適化を目指す。
	④ 本校独自の情報科カリキュラムにおけるプログラミング学習を効果的に実践し、プログラミング的思考の定着を図る。また、各学年の系統的な指導を実践する。 (情報科カリキュラム)			④ 本校独自の情報科カリキュラムにおけるプログラミング的学習を効果的に実践し、プログラミング的思考の定着を図った。	④ 本校独自の情報科カリキュラムにおけるプログラミング学習を効果的に実践し、プログラミング的思考の定着を図る。また、各学年の系統的な指導を実践する。

評価項目	具体的目標・方策 及び評価指標 ※（ ）内は評価指標	自己評価結果		評価結果の分析 (評価の観点、理由)	今後の課題・改善方策
2 ICT教育を推進し、教育の個別最適化をめざす	⑤ 情報科による「プログラミング教育」に基づき、5・6年生全員を対象にその発展教育として前年度に引き続き「出張ロボット体験授業」を実施する。また、希望者によるロボット教室を年間計画のもと開講し、WRO (World Robot Olympiad) への出場を目標に、技術力の向上を図る。低学年はアフタースクールと連携し、希望者体験教室を開催する。 (発展学習として「出張ロボット体験授業」)	A	A	⑤ 5・6年生全員を対象に「出張ロボット体験教室」を実施した。また、希望者によるロボット教室を年間計画のもと開講。WRO (World Robot Olympiad) では、奈良県大会で準優勝し、全国大会に出場した。低学年はアフタースクールと連携し、希望者体験教室を開催した。	⑤ 情報科による「プログラミング教育」に基づき、5・6年生全員を対象にその発展教育として前年度に引き続き「出張ロボット体験授業」を実施する。 また、希望者によるロボット教室を年間計画のもと開講し、WRO (World Robot Olympiad) への出場を目標に、技術力の向上を図る。低学年はアフタースクールと連携し、希望者には体験教室を開催する。
3 国際理解教育の充実	① 4技能強化と授業との連携を意識した英語モジュール学習を計画的に実施する。また、英語科との調整を密にし、学習内容の充実を図る。 (英語科モジュール実施計画)	B		① 朝のモジュール時間帯において、英語科以外の課題も多く、英語の比重が少なくなってしまう現状がある。2学期末の発表会に照準を合わせ、計画的に時間を確保した。	① 4技能強化と授業との連携を意識した英語モジュール学習を計画的に実施する。また、英語科との調整を密にし、学習内容の充実を図る。
	② 本校の特徴である国内留学について、4学年を系統的に捉え、内容の充実を図る。帝塚山大学との連携により、効果的でリスクの少ない行事の在り方を追及し、対外的に発信する。この行事が英語学習の大きな動機付けになるよう、年間英語カリキュラムにおいて、より効果的に位置づける。発達段階に応じて会話が向上するよう、4年間のプログラムをさらに強化する。 (学年別実施計画、実施後児童アンケート及び保護者宛実施報告書)	A	B	② 国内留学は、夏休み中の帝塚山大学東生駒キャンパスを借用し、日常を離れた広々とした会場にて、より効果的でリスクの少ない行事として実施した。3～6年生の4学年を系統的に捉え、内容の充実を図った新たな系統的プログラムを構築した。英語圏での実際の生活を想定し、英語の学習だけでなく、英語をツールとした様々な活動や学習をカリキュラムとして明確化し実施した。近年かなり定着してきた。	② 本校の特徴である国内留学について、4学年を系統的に捉え、内容の充実を図るとともに対外的に発信する。帝塚山大学との連携により、効果的でリスクの少ない行事の在り方を追及する。この行事が英語学習の大きな動機付けになるよう、年間英語カリキュラムにおいて、より効果的に位置づける。発達段階に応じて会話が向上するよう、4年間のプログラムをさらに強化する。
	③ 国際理解の礎となる日本文化への理解が深められるような授業や校外学習を実施し、外部に発信できる情報を身につける。和太鼓の体験や大和文華館見学を通して、伝統文化に触れ、外部に発信できる情報のひとつとする。 (外部に発信できる情報として日本文化の体験学習、大和文華館交流)	B		③ 外部に発信できる材料として、海外に日本文化や伝統文化、伝統工芸を発信する計画を策定した。和太鼓の体験や大和文華館見学を通して、伝統文化に触れ、そのことを保護者に知らせた。ハワイの小学校が視察に訪れた時、日本の文化について伝えることができた。	③ 国際理解の礎となる日本文化への理解が深められるような授業や校外学習を実施し、外部に発信できる情報を身につける。
4 特別活動・体験教育の充実を図り、ESD教育の展開をめざす	①-1 「本物にふれる教育」を定着させるため、各教科における校外学習・現場実習を一層充実させる。また、その効用を広く保護者や外部に広報し、本校教育の特徴をはっきり印象付ける。 (ホームページ、学校だより)	A	A	①-1 「本物にふれる教育」を目指し、体験学習や出張授業などを積極的に採り入れた。また、全学年で夏合宿を開催し、内容についても、コロナ禍明けに検討した結果を活かし、内容をさらに充実させた。	①-1 「本物にふれる教育」を定着させるため、各教科における校外学習・現場実習を一層充実させる。また、その効用を広く保護者や外部に広報し、本校教育の特徴を印象づける。

評価項目	具体的目標・方策 及び評価指標 ※（ ）内は評価指標	自己評価結果		評価結果の分析 (評価の観点、理由)	今後の課題・改善方策
4 特別活動・体験教育の充実を図り、ESD教育の展開をめざす	①-2 外部講師出張授業を積極的に計画実施する。また、外部機関と連携し、環境教育を一層推進することにより、ESD教育の展開を目指す。校内だけでなく、宿泊行事を有効に活用し、専門家の指導助言を受けることにより、現場実習をより充実させる。 (全学年での外部講師出張授業を年間最低1回) ②「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、教科・学年の枠を超えたカリキュラムマネジメントを行い、外部講師出張授業を積極的に計画実施する。また、卒業生や保護者によるキャリア教育を推進する。 (卒業生や保護者によるキャリア教育、ホームページ、学校だより)	A	A	①-2 外部講師出張授業を積極的に計画実施した。また、奈良市や外部機関と連携し、環境教育を一層推進することにより、ESD教育を展開した。また、春の遠足に環境教育を採り入れるため、各機関に協力を依頼した。 ②「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、外部講師出張授業を積極的に実施した。出張授業内容に応じて、カリキュラムを学年間で調整した。ポップコーンプロジェクト実施に際し、卒業生の協力を得ることができた。	①-2 外部講師出張授業を計画実施する。また、外部機関と連携し、環境教育を一層推進することにより、ESD教育(持続可能な開発のための教育)の展開を目指す。校内だけでなく、宿泊行事を有効に活用し、専門家の指導助言を受けることにより、現場実習をより充実させる。 ②「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、教科・学年の枠を超えたカリキュラムマネジメントを行い、外部講師出張授業を計画実施する。また、卒業生や保護者によるキャリア教育を推進する。
5「帝塚山で学び、育つ」ことを意識した学園各学校園の連携強化・内部進学への推進	① 帝塚山大学との連携を深める。教育学部とは、情報交換を積極的に行い、授業研究及び教育サポーターを充実させる。現代生活学部食物栄養学科とは、食育、健康教育を推進する。また、大学の協力を受け、教育サポーター活動をより充実させるほか、心理学部からも学生を受入れ、より連携を深める。 (帝塚山大学学生の実施、サポーター報告書) ② 帝塚山中学校・高等学校との生徒児童間及び教員間での教育連携の推進を図る。また、内部進学推薦制度をさらに有効に活用し、児童の意欲・学力を高めるため、制度の改定を進め、内部中学出願率、進学率の向上を目指す。教科指導面における小学校と中学校間の情報交換を推進し、効果的な小中連携を実現する。 (教科間における小学校と帝塚山中学校間の情報交換。内部進学率目標60%)	A	B	① 帝塚山大学教育学部との相互の連携を深めた。特に、学生の現場経験を進めるために、教育サポーターを積極的に募集。定期的な参加により、指導の充実を図ることができた。教育学部生以外にもサポーターを受け入れた。また、現代生活学部食物栄養学科との連携により、食育、健康教育を推進した。 ② 生徒児童間の直接的な交流連携については、十分な機会を確保するに至らなかったが、教員間においては中学校・高等学校との教育内容に関する情報交換を密に行い、小中一貫教育の質的向上に努めた。進路面では、従来の推薦制度に加え、本年度より「ステップアップ制度(内部進学推薦制度での合格結果を保持したまま、一般入試でより上位コースへの挑戦が可能な制度)」を新たに導入した。同制度を活用し、中学校の希望コースへの進学を果たした成功事例が出るなど、個々の意欲に応える指導体制を構築できたことは大きな成果である。一方で、内部進学率は昨年度並みの49%に留まり、目標としていた60%には届かなかった。この要因として、「基礎学力の向上に伴い、児童・保護者の進路選択がより多様化したこと」、および「外部難関校への挑戦志向が強まったこと」が挙げられる。	① 帝塚山大学との連携を深める。教育学部とは、情報交換を積極的に行い、授業研究及び教育サポーターを充実させる。現代生活学部食物栄養学科とは、食育、健康教育を推進する。また、帝塚山大学の協力を受け、教育サポーター活動をより充実させるほか、心理学部からも学生を受入れ、より連携を深める。 ② 帝塚山中学校・高等学校との生徒児童間及び教員間での教育連携の推進を図る。また、内部進学推薦制度をさらに有効に活用し、児童の意欲・学力を高めるため、制度の改定を進め、内部中学出願率、進学率の向上を目指す。教科指導面における小学校と中学校間の情報交換を推進し、効果的な小中連携を実現する。 そしてステップアップ制度のさらなる周知と、内部進学における魅力の再提示を課題とし、児童一人ひとりの特性に合致した進路実現を支援していく。

評価項目	具体的目標・方策 及び評価指標 ※（ ）内は評価指標	自己評価結果		評価結果の分析 (評価の観点、理由)	今後の課題・改善方策
5 「帝塚山で学び、育つ」ことを意識した学園各学校の連携強化・内部進学率の推進	③ 帝塚山幼稚園との算数、英語などの授業連携を推進するとともに、教員交流を積極的に行い、幼稚園小学校両校園の教育内容の相互理解を深める。また、帝塚山幼稚園との園児児童間交流を積極的に進め、連携を図ることにより、内部進学率の向上をめざす。 (教員交流、園児児童交流の実施、ホームページ、学校だより)	A		③ 帝塚山幼稚園と算数の教員交流を実施したほか、幼稚園小学校両校園の教育内容の相互理解について、管理職を中心に交流を深めた。 また、読み聞かせ交流はインフルエンザ感染予防のため中止になったが、映像による交流を実践した。	③ 帝塚山幼稚園との算数などの授業連携を推進するとともに、教員交流を積極的に行い、幼稚園小学校両校園の教育内容の相互理解を深める。 また、帝塚山幼稚園との園児児童間交流を積極的に進め、連携を図ることにより、内部進学率の向上をめざす。
	④ 総合学園としての内部進学率の在り方について共通認識を持つ。令和6年度の内部進学率を踏まえ、児童の意欲・学力を高めるため、制度の改訂を進め、内部中学出願率、進学率の向上を目指す。少子化に対応できる新制度の方向性と小学校の学習カリキュラムの整備及び基礎学力の向上を目指す。また、進路指導部を中心に、内部・外部両方向にむけた進路指導の実現を図り、児童それぞれの特性に応じた進学指導・助言を充実させる。 (児童それぞれの特性に応じた進学指導・助言。家庭との連携による内部進学率向上。)	B	B	④ 内部進学推薦制度の充実を図るべく、中学校管理職との協議を重ね、現行制度の再確認とともに小学校カリキュラムの再整備による基礎学力向上に努めた。進路指導部を中心に、児童の特性に応じた「内部・外部両方向」へのきめ細やかな指導体制を構築し、保護者の多様なニーズへの対応を推進した。 今年度より、従来の推薦制度に加え「ステップアップ制度(内部進学推薦制度での合格結果を保持したまま、一般入試でより上位コースへの挑戦が可能な制度)」を新設した。	④ 総合学園としての内部進学率の在り方について共通認識を持つ。令和8年度の内部進学率を踏まえ、児童の意欲・学力を高めるため、制度の改訂を進め、内部中学出願率、進学率の向上を目指す。少子化に対応できる新制度の方向性と小学校の学習カリキュラムの整備及び基礎学力の向上を目指す。また、進路指導部を中心に、内部・外部両方向にむけた進路指導の実現を図り、児童それぞれの特性に応じた進学指導・助言を充実させる。
6 人権教育・道徳教育を強化し人間性を築く	①-1 児童の人権意識を高めるには、教員組織の共通理解に基づく日々の生活指導が重要であるという認識のもと、規範意識を推進し、多様性を認める人権の新しい価値観の育成に努める。 (人権委員会資料、ホームページ、学校だより、保護者説明資料、市人教実践報告書)	A		①-1 児童の人権意識を高めるには、教員組織の共通理解に基づく日々の生活指導が重要であるという認識のもと、規範意識の向上を推進し、多様性を認める人権の新しい価値観の育成に努めた結果、互いの個性を認め合い、相手の立場を尊重した言動が日常の随所で見られるようになった。	①-1 児童の人権意識を高めるには、教員組織の共通理解に基づく日々の生活指導が重要であるという認識のもと、規範意識を向上させ、多様性を認める人権の新しい価値観の育成に努める。
	①-2 いじめの有無や児童間のトラブル等を早期に把握するため、いじめアンケートを実施するとともに、問題事案について教員で情報を共有する。また、教員のいじめ問題への理解と対応力を向上させるため研修等を行う。 (いじめアンケートの実施、研修会の実施)	A	A	①-2 いじめの有無や児童間のトラブル等を早期に把握するため、定期的なアンケートを1・2学期に実施した。把握した事案については教員間で即座に情報を共有し、迅速な対応に努めた。また、教員のいじめ問題に対する理解と対応力を高めるための研修を継続的にを行い、組織として未然防止および早期解決を図る体制を強化した。	①-2 いじめの有無や児童間のトラブル等を早期に把握するため、いじめアンケートを毎学期実施するとともに、問題事案について教員で情報を共有する。また、教員のいじめ問題への理解と対応力を向上させるため研修等を行う。
	② 年間計画に従った道徳教育を実施すると共に、クラスの実情に応じた授業を構成し実践することにより、普遍的な人間性の育成を目指す。学習の成果を学年ごとに持ち寄り、学習内容についての検証を行う。 (学期ごとの道徳教育目標及び実践報告)	A		② 年間計画に従った道徳教育目標を学期ごとに設定し、クラスの実情に応じた授業を実践した。またその内容を集約し、全教員で共有するとともに検証を行った結果、実践と振り返りのサイクルが定着し、根拠に基づいた次学期の目標設定が行えるようになるなど、組織としての教育力が一層強化された。	② 年間計画に従った道徳教育を実施すると共に、クラスの実情に応じた授業を構成し実践することにより、普遍的な人間性の育成を目指す。学習の成果を学年ごとに持ち寄り、学習内容についての検証を行う。

評価項目	具体的目標・方策 及び評価指標 ※（ ）内は評価指標	自己評価結果		評価結果の分析 (評価の観点、理由)	今後の課題・改善方策
7 学校評価の実 質化	① 保護者アンケートの集計結果・内容について検討し、その分析結果を職員会議で共有する。改善点や今年度の課題を教職員で共通認識し、問題点の改善、早期解決を図る。 (保護者アンケートの結果及び分析資料)	A	A	① 昨年度末に実施した保護者アンケートの集計結果・内容について検討。内容は職員会議で分析検討を実施。その分析結果を活用して自己評価を教職員で共通認識し、問題点の改善、解決を図った。保護者のニーズと学校側の指導方針のズレが解消され、全教職員が一貫した姿勢で教育活動にあたる体制が強化された。これにより、個々の課題に対して組織的かつ迅速に対応する風土が定着した。	① 保護者アンケートの集計結果・内容について検討し、その分析結果を職員会議で共有する。改善点や今年度の課題を教職員で共通認識し、問題点の改善、早期解決を図る。
	② 学校関係者評価委員会の評価結果を教職員に周知徹底し、学校運営において、より一層の改善を図る。選ばれ続ける学校作りを実現する。 (学校関係者評価)	A		② 4月22日に学校関係者評価委員会を開催。その評価結果を踏まえ、学校運営の改善を図った。	② 学校関係者評価委員会の評価結果を教職員に周知徹底し、学校運営において、より一層の改善を図る。選ばれ続ける学校作りを実現する。
8 教員評価の実 施推進	① 各教員が自分の年度重点目標をしっかりと認識する。中間期面接、学年末面接を実施し、各自の目標達成状況及び進捗状況を確認する。 (各自の重点目標達成状況及び進捗状況)	B		① 各教員が授業や学級経営において、自らの課題を客観的に捉え、改善に向けた試行錯誤を継続する姿勢が見られた。面談での対話を通じて指導をより向上させるための鍵となるポイントが明確化され、次年度の資質向上に向けた具体的な指針を得ることができた。	① 各教員が自分の本年度における重点目標をしっかりと認識する。中間期面接、学年末面接を実施し、各自の目標達成状況及び進捗状況を確認する。
	② 組織全体としての意識向上を図り、時代の変化に適応して、学校運営を改善するため、教員自己評価の内容を教員組織内で共有し、全体の課題の認識を目指す。「教員自己評価の結果を共有し、組織全体の意識向上を図る」をめざす。 (職員検討会資料)	A	B	② 一般的に少子化の加速とともに、私立小学校児童募集難が本格化してきている。その中において、現状課題を認識し、教員組織内のさらなる意識向上を目指さなければならないことを共有した。	② 組織全体としての意識向上を図り、学校運営を改善するため、教員自己評価の内容を教員組織内で共有し、全体の課題の認識を目指す。
9 募集活動・広報 活動の強化	① 総合学園のメリットを最大限に広報するため広報の強化及び入学募集定員の充足を図るため、ホームページや学校案内の刷新を進める。各家庭に正確で新しい情報を届けられることができるように、SNS等を活用し、効果的な広報活動を進める。 (ホームページ、担当制度による説明会・体験会、入学募集定員充足)	A		① 広報の強化および入学募集定員充足を図るため、プロジェクトチームを組織し、ホームページや学校案内の刷新を行った。総合学園としてのメリットを最大限に発信する効果的な広報活動を展開したほか、導入2年目となるWEB出願システムも大きなトラブルなく運用でき、利便性の向上を図った。その結果、入学志願者は前年度実績を上回り、募集定員65名に対して67名の新入生を迎え、定員充足を達成することができた。	① 総合学園のメリットを最大限に広報するため、入試広報部を中心としたチームで継続して積極的な広報活動を推進し、ホームページや学校案内のさらなる充実を進める。また、各家庭に正確で新しい情報を届けられることができるように、SNS等を積極的に活用し、効果的な広報活動を進める。これらの取り組みにより、入学募集定員を充足させる。
	② 幼児教室や外部幼稚園にて体験授業、説明会、教育講演会をさらに積極的に開催し、教育方針・教育内容の理解を深めていただくよう、内容の充実を図る。 (外部幼稚園・幼児教室での広報活動の機会を増加)	A	A	② 幼児教室や外部幼稚園にて体験授業、説明会、教育講演会を積極的に開催。新しい対象園(教室)を開拓した。回数・内容は昨年度並みだが、個別の見学会、相談会を充実させ、適齢期保護者に個別に積極的に働きかけた。	② 幼児教室や外部幼稚園にて体験授業、説明会、教育講演会をさらに積極的に開催し、教育方針・教育内容の理解を深めていただくよう、内容の充実を図る。
	③ 在校生保護者や卒業生に協力を仰ぎ、本校の教育を体験して感じた魅力を広く外部に発信し、「帝塚山教育」の理解をより深めていただく。 (在校生保護者や卒業生の声を集めた資料)	A		③ 外部説明会において、在籍児童の保護者を招き、親目線から「帝塚山教育の魅力」を話してもらったところ、大きな効果があり、大変好評であった。	③ 在校生保護者や卒業生に協力を仰ぎ、本校の教育を体験して感じた魅力を広く外部に発信し、「帝塚山教育」の理解をより深めていただく。

評価項目	具体的目標・方策 及び評価指標 ※（ ）内は評価指標	自己評価結果		評価結果の分析 (評価の観点、理由)	今後の課題・改善方策
10 学校リスクの 対策強化・保健衛 生管理の徹底	① 事件・事故の未然防止 に向け、安全対策の徹底と 個人情報、守秘義務の徹底 を図る。また、保護者に対す る情報セキュリティやマ ナーなどの啓発活動を充実 させるとともに、いじめ防止 対策アプリ「スタンドバイ」シ ステムを活用し、問題点を 教員組織で共通認識する。 (防災訓練計画案、校長室 だより、防災訓練マニユア ル、ホームページ、学校だより)	A	A	① 事件・事故の未然防止に向け、安 全対策の徹底と準備について、職員会 議において周知徹底し、教職員の意識 向上を図った。また、保護者に対する情 報セキュリティやネットマナー等の啓 発活動については、文書を通じて実施 した。いじめ防止対策アプリ「スタンドバ イ」システムを活用し、問題点を教員組 織で共通認識した。	① 事件・事故の未然防止に 向け、安全対策の徹底と個人 情報、守秘義務の徹底を図 る。また、保護者に対する情 報セキュリティやマナーなど の啓発活動を充実させると ともに、いじめ防止対策アプリ 「スタンドバイ」システムを活用 し、問題点を教員組織で共通 認識する。
	② 児童の保健衛生管理を 一層向上させるため、健康 教育委員会を中心に安全・ 健康対策の徹底を図り、内 容を検証する。また、感染 症対策(新型コロナ、インフ ルエンザ等)に向けて効果 的な予防策を推奨し、感染 症の予防に努める。 (防災訓練(月1回)、安全・ 健康計画、学校だより、ホー ムページ、保健だより、健康 集会)	A		② 月1回の防災訓練を実施した。ま た、児童の保健衛生管理を一層向上さ せるため、教員の委員会を設置し、児 童の健康意識啓発に努めた。感染症対 策(新型コロナ、インフルエンザ等)に向 けて効果的な予防策を推奨し、感染症 の予防に努めるとともに保健だよりで周 知した。	② 児童の保健衛生管理を一 層向上させるため、健康教 育委員会を中心に安全・健康 対策の徹底を図り、内容を検証 する。また、感染症対策(新 型コロナ、インフルエンザ等) に向けて効果的な予防策を推 奨し、感染症の予防に努め る。
11 研究・研修の 推進	① 新しい授業作りを進める ために、私立小学校連合会 の研修活動や他校との交流 を積極的に進め、最新の情 報収集や教員交流に努め る。 (校内公開授業各学期1 回、連合会の研修会(5月、 11月))	A		① 私立小学校連合会の研修を活用 し、研修活動や研究などで、他私学との 交流をさらに積極的に進めた。校内に おいては、学年別教科ごとに毎学期授 業を公開。	① 新しい授業作りを進める ために、私立小学校連合会の 研修活動や他校との交流を 積極的に進め、最新の情報 収集や教員交流に努める。
	② 本校独自の「おしらせ学 習」を一層充実させ、「課題 解決学習」、「ESD教育」に ついて研究し、授業実践に 反映する。 (「お知らせ学習」の掲示及 び保護者説明会、入学説明 会)	A	A	② 「課題解決学習」、「ESD教育」に ついて、研究・成果を校内に掲示すると ともに、本校への入学を希望する保護 者層にも充実を図った。本校独自の伝 統学習法である「お知らせ学習」(プレ ゼン)を広く広報した。	② 本校独自の「おしらせ学 習」を一層充実させ、「課題解 決学習」、「ESD教育」につ いて研究し、授業実践に反映す る。
	③ 新しい時代の指導体制 に向け、高学年における教 科担任制を確立し、効果的 な教員配置を実施し、新し い学校運営組織を構築す る。 (校務分掌・担任担当表、総 合時間割表)	A		③ 5・6年生において、教科担任制を 完全導入しており、その成果について検 証し、今後の改善を図った。また算教科 でのチームティーチングを確立し、個別 指導を充実させた。	③ 新しい時代の指導体制に 向け、高学年における教科担 任制を確立し、効果的な教員 配置を実施し、新しい学校運 営組織を構築する。
	④ 各学年での学力定着を 強化し、児童の学力向上を 図る。タブレットをはじめ、 ICTを有効活用した学習の 個別最適化を目指す。 (タブレット活用のための研 修会、学習アプリの検証、 基礎学力定着の強化)	A		④ 児童のさらなる学力向上をめざし、 各学年での学力定着を図った。また、タ ブレットを活用し、個別学習ソフトウェア を有効活用した学習の個別最適化をめ ざした授業実践を進めた。	④ 各学年での学力定着を強 化し、児童の学力向上を図 る。タブレットをはじめ、ICTを 有効活用した学習の個別最 適化を目指す。

評価項目	具体的目標・方策 及び評価指標 ※（ ）内は評価指標	自己評価結果		評価結果の分析 (評価の観点、理由)	今後の課題・改善方策
11 研究・研修の 推進	⑤-1 授業力の一層の向上を図るため、帝塚山大学教育学部と連携し、研究公開授業を積極的に実施する。また他学部学生にも呼びかけ、教育インターンシップ活動をさらに推進する。 (連携研究授業の実施・インターンシップ活動の充実・学校行事の補助)	A	A	⑤-1 帝塚山大学教育学部の授業見学やインターンシップ活動を通して、両校が連携を深めると共に、授業力のより一層の向上を図るため、校内公開授業を積極的に実施した。また、教育学部生以外にもサポーターを受け入れた。	⑤-1 授業力の一層の向上を図るため、帝塚山大学教育学部と連携し、研究公開授業を積極的に実施する。また他学部学生にも呼びかけ、教育インターンシップ活動をさらに推進する。
	⑤-2 ICTを活用した授業実践について、教育内容・方法等に関する研修を実施する。また、その内容を検証し、問題点を修正する。 (タブレットを活用した授業研究の実施計画及び学習ソフトウェアの充実)	A		⑤-2 ICTを活用した授業実践について、研究授業を実施。活用法や教育内容について検証し、教員内で共有した。新しいシステム導入に向けて、研修を進めた。	⑤-2 ICTを活用した授業実践について、教育内容・方法等に関する研修を実施する。また、その内容を検証し、問題点を修正する。
12 経営安定化策 の強化	① 費用対効果を十分に考慮した学校予算の精査などの節減対策を推進する。 (物件費の削減)	A	B	① 費用対効果を十分に考慮した学校予算の精査などの節減対策をさらに推進した。	① 費用対効果を十分に考慮した学校予算執行の精査などの節減対策を推進する。
	② 教員の健康管理を徹底し、教員組織の適正を図り、人件費の削減を進める。 (メンタルヘルスケアの実施、人件費削減)	B		② 教員の心身の健康管理を啓発。相談しやすい雰囲気作りを進めると共に、教員組織の安定を図った。	② 教員の健康管理を徹底し、教員組織の適正を図り、人件費の削減を進める。

3. 学校関係者評価

学校関係者評価実施日：令和8年4月21日

学校関係者評価委員会委員：育友会副会長（2名）、帝塚山大学准教授、帝塚山幼稚園園長

意 見	改 善 方 策
1. 学習指導および英語教育の充実 ①英語教育については現状「B評価」と捉えており、さらなる伸びしろを期待する。特に小学校卒業までにアルファベットを完全に習得させるなど、基礎学力の確実な定着を強く望む。 ②短時間学習（モジュール学習）をさらに充実させ、日常的に英語に触れる環境づくりを推進されたい。 ③学校側の負担に配慮しつつも、児童の興味関心を広げる体験型授業の機会を適切に確保・拡充することを期待する。	①英語科教員と連携し、モジュール学習の質的向上を図る。特に毎朝の帯時間を活用した反復学習をルーチン化する。 ②大学との連携事業や外部講師講演会などに体験型事業を展開できるように、検討・実施をする。
2. 幼・小・中・高・大の連携と内部進学の内滑化 ①小学校から中学校への進学に際し、環境や学習面でのギャップ（壁）が大きいとの指摘がある。内部中学校との連携を一層深め、児童が不安なく進学できる体制を構築すべきである。 ②幼稚園から大学までスムーズに進学できる一貫校の強みを再確認し、保護者の期待に応える接続教育を推進すること。これが結果として小学校受験者の増加や、学校全体の活性化につながる。	①指導計画や児童の情報を中学・小学校間で密に共有し、指導法やカリキュラムの連続性を確保する。これにより、進学時の学習・環境の変化に伴う負担（中一の壁）を最小限に抑える。 ②幼・小・中高・大の各段階で、合同行事や授業交流を活性化させる。異年齢交流や高度な学びに触れる機会を増やすことで、児童の意欲を高め、保護者の総合学園としての理解と信頼を深める。
3. 独自教育の継承と卒業生（同窓生）との絆 ①卒業生の子女の入学が増加傾向にあり、本校の独自教育は卒業生にとっても魅力的なものであると再評価されている。この独自性を維持・発展させることが重要である。 ②幼稚園から小学校へのスムーズな進学を含め、総合学園のメリットを保護者へより積極的にPRしていくことを求める。	①幼稚園から大学までが揃う本校ならではの教育環境や、校種を越えた「接続教育」の具体例を、説明会やSNS等で積極的に発信する。特に、内部進学によって生まれる学習の「ゆとり」や「学びの連続性」を可視化し、総合学園だからこそ提供できる安心感と成長の質を強力にPRする。 ②卒業生が自分の子どもや孫を託したいと考える「教育の質」を再確認し、代々受け継がれる本校の独自教育をさらに進化させる。
4. 教育環境の整備と教員の資質向上 ①教育の質を決定づけるのは「環境」と「教員の指導力」である。教員一人ひとりが質の高い授業づくりに邁進することが、最大の宣伝となり、子どもの確かな成長へと直結する。 ②私学への投資は保護者の期待の表れであることを受け止め、教育環境の継続的な改善と、それを通じた魅力ある学校づくりを強く要望する。	①教員一人ひとりの授業力を磨くため、ICTを効果的に活用した公開授業や教員同士の相互参観を活性化させる。「教え方」の好事例を全校で共有し、児童が主体的・意欲的に学べる高品質な授業を組織的に作り上げる。 ②保護者からの投資を、最新の学習設備や安全な校内環境の整備へと着実に反映させる。ハード面（施設・設備）とソフト面（デジタル教材・教員力）の両輪で、私立学校としての付加価値を常に高めていく。